

# 犠牲死する者の積極性

— 偽フィローン『聖書古代誌』における  
エフタの娘セイラ

井阪民子

はじめに

偽フィローンの『聖書古代誌』 (*Liber Antiquitatum Biblicarum*. 以下 LAB と略記) はアダムからサウルまでのイスラエルの歴史を時代を追って物語ったものである。ローマ帝政期にパレスチナでユダヤ人著者によって書かれ、成立時期は紀元後 70 年前後から 2 世紀半ばまでの間と推定されている。偽フィローンという名はこの書がフィローンの著作とともに写本で伝わったためにあるもので、真の著者は不明である。元はヘブル語で書かれたがギリシア語に翻訳され、そのギリシア語版が 4 世紀頃ラテン語に翻訳されたと考えられている。現存するテキストはラテン語版のみである<sup>(1)</sup>。

エフタの娘セイラが父によって神に犠牲として捧げられる物語は LAB 39.10-40.8 にある。これは士師記 11:29-40 の記述に基づく。以下は士師記の記述の要約である。イスラエルの士師の一人であるエフタは祖国を圧迫するアンモン人と戦い勝利を得るが、戦いの前に神に誓願を立てていた。その誓願とは、敵に勝利することができたなら、自分が帰還したとき最初に出迎えた者を神に捧げるというものであった。果たして彼が帰還したとき、出迎えに最初に現われたのは彼の一人娘であった。父は苦悩するが、結局誓願は果たされ、娘は犠牲に捧げられて死ぬ。

LAB においてもエフタの誓願から娘の犠牲死まで、生起する事柄は士

師記とほぼ同じである（娘は士師記では名はないが、*LAB*ではセイラ Seila という）。しかし、*LAB*のセイラに関する記述は士師記のそれよりもかなり長く詳細で、旧約との相違が際立つ箇所もある。セイラの独白（悲歌）はその1つである。彼女はギリシア悲劇の主人公のように、死を前にした自らの心情を吐露する<sup>(2)</sup>。またエフタが娘を犠牲に捧げる行為と、アブラハムがイサクを犠牲に捧げようとする行為とを結びつけている点も、相違の1つである。また、一読してセイラは士師記のエフタの娘よりも自らの犠牲死に対しより積極的である。

*LAB*におけるイサクも自らが犠牲になることに積極的であり、従来の研究においてセイラは*LAB*のイサクとの関連においてしばしば論じられてきた<sup>(3)</sup>。しかし、彼女について物語る*LAB*の記述にはテキストの読みや解釈においてまだ多くの問題点が残されたままである。それらの問題点の幾つかを検討し解明に努めることが本稿の課題である。取り上げる問題点は大きく分けて2つある。その1つは40.3の終わりにあるセイラの危惧の表明に関わり、もう1つはセイラが悲歌の冒頭で述べる願望に関わる。彼女の危惧および願望の内容は正確にはどのようなものであるのかを明らかにしていきたい。これを明らかにすることにより、*LAB*の著者が彼女を犠牲死に対していかなる考えと熱意をもった人物に描いているかを示すことができるだろう。

本稿で検討する箇所はセイラが自らの犠牲について述べ、また行動する箇所（40.2—5）が中心となるが、エフタの誓言からセイラの犠牲死まで（39.10—40.8）*LAB*の記述はどう構成されているのか、内容上分けたものをここで示しておく：

- a) エフタの誓言（39.10）
- b) 神のエフタへの怒り（39.11）
- c) エフタ帰還し、セイラ出迎える。娘へのエフタの言葉と苦悩（40.1）
- d) セイラの返答（40.2—3）

- e) セイラ，賢人たちを訪ねる．神の独白（40.4）
- f) セイラの悲歌（40.5—7）
- g) セイラ犠牲死，埋葬（40.8）

## 1. quia...pater meus（40.3）の理由文

セイラは自分の犠牲死が神に受け入れられるのか，また魂を無駄に失うことにはならないのかについて危惧を表す．その箇所を含んだ40.2—3を以下に引用する（①②…の番号と下線は筆者が付したもの．和訳はこのテキストに即した訳を便宜上示したが，後述するように下線部のテキストは私見では修正を要し，和訳もそれに伴い変更される）<sup>(4)</sup>：

2. ①Et dixit ei Seila filia eius: Et quis est qui tristetur moriens, videns populum liberatum? ②Aut inmemor es que facta sunt in diebus patrum nostrorum, quando pater filium inponebat in holocaustum, et non contradixit ei sed epulans consensit illi, et erat qui offerebatur paratus, et qui offerebat gaudens? 3. ③Et nunc omnia que orasti non destruas, sed fac. ④Unam autem petitionem peto a te antequam moriar, postulationem minimam exoro priusquam reddam animam meam: ut vadam in montes et permeem in collibus et perambulem petras, ego et convirginales mee, et effundam in eis lacrimas meas et referam tristitias iuventutis mee. ⑤Et plorabunt me ligna campi, et plangent me bestie campestris, quia non sum tristis in hoc quod moriar, nec dolet mihi quod reddo animam meam, sed quoniam in oratione preoccupatus est pater meus; ⑥et si spontaneam me non obtulero in sacrificium, timeo ne non sit acceptabilis mors mea, aut in vano perdam animam meam. ⑦Hec referam montibus, et post revertar.

2. ①彼の娘セイラは彼に言った。「民が解放されたのを見ていながら、

誰が死ぬのを悲しみましょうか。②あるいは父祖たちの時代に起きたことをお忘れですか。その時、父親は息子を焼き尽くす献げ物として置き、息子は父に逆らわず喜んで父に同意しました。そして捧げられようとしていた者は準備ができており、捧げようとした者は喜んでいたのです。3. ③今、あなたが誓ったことはどれも取り消してはならず、実行してください。④けれど、私は死ぬ前にあなたに一つだけお願いを申し上げます。魂をお返すする前にごく小さなお願いがあるのです。それは、私と友達の娘たちが山に行って丘に留まり<sup>⑤</sup>岩の上を歩き回ることです。そして私はそこで涙を流し、私の若さの悲しみを語ってでしょう。⑤野原の木々は私のことを嘆き、野の獣は私を悼むでしょう。なぜなら、私は死ぬということは悲しくなく、魂をお返すすることに痛みを覚えるのでもありませんが、父が誓いによって畏にかかったことが悲しいからです。⑥そしてもし私が犠牲のために自らを自発的に捧げないなら、私の死は意に適うものではないのではないか、あるいは私は魂を空しく失うことになるのではないかと私は恐れているのです。⑦こうい  
ったことを私は山々に告げ、その後戻るでしょう」。

彼女の危惧は⑥で表明されている。私見では⑤がそれと密接に関係があるが、従来の解釈ではその関係は認識されていない。本節ではこれについて検討する。

④—⑤には悲嘆を示す表現が散見されるが、彼女が悲しく思う事柄は2つ存在することが読み取れるであろう。1つは自分が青春のさなかに逝くこと(④)であり、もう1つは父が自ら立てた誓いで身動きできなくなったこと(⑤)である。ところで上で引用したテキストに拠ると、⑤冒頭の「野原の木々」や「野の獣」が彼女のことを嘆く理由は、彼女が父の状況を悲しく感じているからということになる(quia以下)。だが、この理由は文脈にあまりそぐわないのではないだろうか。④で彼女は慣れ親しんでいたであろう野山や岩場に行き、若くして死なねばならない悲しみをそ

の場所で語るつもりだと述べている。木々や獣について言及がなされるのはこの直後である。自然の生き物は自然の中で彼女が思いを吐露するがゆえに、それに呼応して嘆くのではないだろうか。つまり、木々などが嘆く理由は④末の文 *effundam...iuventutis mee* で示されていると考えるべきであろう。

木や獣が嘆く理由をこのように解したほうがよい根拠は他にもある。それは、セイラが山に出かけて歌う悲歌中の次の文にある (40.7) :

7. *Inclinate arbores ramos vestros, et plangite iuventutem meam. Venite fere silvarum et conululate supra virginitatem meam, quoniam abscisi sunt anni mei et tempus vite mee in tenebris inveteravit.*

木々よ、枝を垂れて私の若さを嘆いて下さい。森の獣よ、来て私が処女のままであることに呻き声を上げてください。なぜなら私の年月は断ち切れ、私の人生の時は闇の中で老いるでしょう<sup>(6)</sup>から。

彼女はこの文で *arbores* 「木々」や *fere silvarum* 「森の獣」に嘆いてくれるよう呼びかけている。これは *ligna campi* 「野原の木々」、*bestie camp-estres* 「野の獣」が嘆くであろうという 40.3 の⑤の文を強く思い起こさせるので、2つの文は対応関係にあるとみなしてよいだろう。40.7 で木々が嘆くのは *iuventutem meam* 「私の若さ」、*virginitatem meam* 「私の処女性」であり、*quoniam* 以下でいっそう詳しく早世ゆえの嘆きであることが語られる。この同じ *iuventus mea* の語は 40.3 の④末にも用いられている。40.3 と 40.7 の対応関係を考慮に入れると、前者においても彼女の早世を自然界の生き物の嘆きの理由と判断するのが適切であろう。

他方、彼女が悲しく思う事柄のもう1つ、つまり父が自ら立てた誓いで身動きできなくなったことは、私見によると後続する *et si* 以下の文と関連している。40.3 ⑤の *quia...pater meus* は木々などが嘆く理由を示すのではなく、後続する主文 (⑥の *timeo* 以下) の理由を示す文であると考え

るのである。

40.3 ⑤の quia 以下を直前の文の理由文とみなさないのは、筆者の知る限り Riessler の訳のみで、これ以外のすべてのテキストおよび訳では直前の文の理由文とされている。ただし Dietzfelbinger では、quia から⑤途中の animam meam までが直前の文の理由文とされ、続きの sed quoniam ...pater meus はむしろ timeo 以下の理由文とされている。だがこの場合、セイラが死ぬのを悲しんでいないので木々などは嘆く、と彼女は言うことになる、まったく文脈に合わない文章になってしまう。一方、Riessler は quia...pater meus を直前の文の理由文とはみなさないけれども、quia 節を後続の⑥の timeo 以下と関連づけることもしない。Riessler では quia の文は理由文でないかのように訳されており、これでは quia の用法の説明はつかないであろう<sup>(7)</sup>。

したがって先述のように、quia...pater meus は後続する⑥の timeo 以下の理由文であると考えるのが適当である。それに伴い、引用したテキストの下線部において2箇所、句読点の打ち方を変更する必要がある。まず quia の直前の campestris の後にピリオドを打つ。次に⑤の終わりの pater meus の後のセミコロンをコンマに変える。

このように変更したテキストを⑥に関連づけるとどうなるのかを説明すべきであるが、先に⑥の文を検討せねばならない。その文自体にも問題があるからである。

## 2. et si...sacrificium (40.3) の読みの修正；セイラの危惧

⑥の et si 以下文末まで、文の内容は特に問題なく理解できるように一見思われるものの、文脈を考えると2つの点で大いに疑問である。1つは Jacobson も指摘しているように、①—②で既にセイラが喜んで犠牲になることは明らかであるのに、なぜここでは進んで犠牲にはならない可能性に言及し危惧しているのか<sup>(8)</sup>。これに対する答えとして、彼女は一旦は決心したがその決心がぐらついたのだ、あるいは内心は揺れ動いているのだ

と言う人があるかもしれない。しかしこの解釈は当てはまりそうにない。彼女の発言はここで終わっているのであるから、進んで犠牲になることに関し最終的に彼女は曖昧な態度を示して発言を終えていることになる。ところが、この後で神は彼女に最高のとってよいほどの評価を与えている(40.4)。決心があやふやな彼女の姿はその評価にふさわしくないであろう。

もう1つの疑問は、彼女に対する「賢人たち」の反応と関連する。彼女の反応はこの彼女の発言(⑥)の直後に記されている。彼女は山へ行く前に彼らのところに行き何事かを語るが、彼らは一人として彼女に答えることができなかった(et venit, et narravit sapientibus populi, et nemo potuit respondere ad verbum eius), とある(40.4)。彼女は何を語ったのであろうか。彼女は⑥で危惧を表明していた。その危惧を払拭するため、彼女は解決を求めて賢人たちを訪ねたと想像される。だがまさに⑥の文が示すように、犠牲を神に受け入れてもらえるかどうかは自らの自発性にかかっていることを彼女自身承知しているのである。それでもなお決心がつかないので賢人たちにその点—自発的でないと神に受け入れてもらえず、魂を無駄に失ってしまうのかどうか—を確認しに行ったのだろうか。そのような彼女に対して神が最高の評価を与えるというものやはり考えにくい。神の言葉(独白)は次の通りである(40.4)：

①Ecce nunc conclusi linguam sapientum populi mei in generationem istam, ut non possent respondere filie Iepte ad verbum eius, ut compleretur verbum meum, nec destrueretur consilium meum quod cogitaveram. ②Et ipsam vidi magis sapientem pre patre suo, et sensatam virginem pre omnibus qui hic sunt sapientibus. ③Et nunc detur anima eius in petitione eius, et erit mors eius preciosa ante conspectum meum omni tempore, et abiens decidet in sinum matrum suarum. 今や見よ、私はこの世代における<sup>(9)</sup>私の民の賢人らの口を封じた。彼らがエフタの娘の言葉に答えることができないように。それは私の言葉が

成就されるため、また私が考えた計画が覆されることのないためである。私は彼女がその父よりも賢いのを、またここにいる賢人全員よりも娘のほうが思慮深いを見た。今、彼女の魂はその願いによって与えられよ。彼女の死はいつまでも私の前に貴いものとなろう。彼女は去って死に、その母たちの懐に収まるであろう。

セイラの問いに賢人たちは答えられなかったが、その理由を神は自らの計画を遂行するためであると述べている。成就すべき神の言葉と計画 (*verbum meum...consilium meum*) とは、39.11 でエフタの軽率な誓いに怒った神が、誓いは彼の一人娘の犠牲において成就するようにと述べた言葉を指すのであろう<sup>(10)</sup>。その成就のために神が賢人の口を封じたということは、彼らはセイラの問いを受けて犠牲に賛成せずこれをやめさせようとする者であることになろう。実際この箇所に関連して研究者たちは、エフタの誓いは律法に反し無効であるとラビ文献で述べられていることを指摘している<sup>(11)</sup>。従って賢人たちがセイラに述べるはずだった答は、「娘をいけにえにするようなエフタの誓いは無効だ、よって犠牲は行われてはならない」といった内容であったと推察される。だが、これはセイラの疑問に対する答にはなっておらず、彼女の危惧とはかみ合わないのではないだろうか。

上の2つの疑問は⑥における  $\pi$  の異読を考慮に入れると、解消できる可能性がある。SC の読みは  $\Delta$  によるが、*et si...sacrificium* まで  $\pi$  に異読がある<sup>(12)</sup>：

$\Delta$  : *et si spontaneam me non obtulero in sacrificium*

$\pi$  : *et spontaneam me obtuli in sacrificium*

$\pi$  の読みをそのまま採用することはできない。文脈上、また構文上不適当だからである<sup>(13)</sup>。だが、Jacobson は  $\pi$  に正しいテキストの要素が含まれている可能性を指摘し、 $\pi$  の *et* の後に  $\Delta$  の *si* を入れる読みを提案する<sup>(14)</sup>。この案は非常に優れていると思われる。Jacobson の修正による読み *et si*

spontaneam me obtuli in sacrificium (「私が犠牲のため自発的に自らを捧げたとはいえ」)は、先行するセイラの毅然とした言葉と矛盾せず、また神の彼女に対する高評価にもふさわしい。πでは動詞の時称は完了であるが、これは未来に行われる犠牲の行為自体を示すのではなく、彼女が精神的には自らをすでに犠牲に捧げており、もはや心は犠牲にのみ向いていることを示すとみなされる<sup>(15)</sup>。

さらにこの読みに拠れば、賢人たちへのセイラの問いと前者の(推察される)回答との関係が、問と答としてきちんと成り立つように思われる。ただ、この点で Jacobson と筆者の解釈はまったく異なる。Jacobson は π (+si) の読みに拠りながらこう述べる:「おそらくセイラの恐れというのは、たとえ自分が喜んで犠牲になっても、いけにえが人間であるというまさにその事実のゆえに自分の犠牲は神に受け入れてもらえないかもしれない、ということであろう」<sup>(16)</sup>。だが、人間の娘がいけにえであることは LAB の中では問題として提示も示唆もされていない。注 11 で見たようにこれは LAB の外では大問題ではあるが、この Jacobson の解釈は⑤の quia...pater meus の節とは関連をもたない。彼はこの節を直前の木々の嘆きの文と結び付けているからである。これに対して、上の④—⑤の検討で示したように、⑥は⑤の quia 節と併せて読まねばならないというのが筆者の立場であるから、そこから導き出される解釈はおのずと異なる。ここで改めて、句読点の変更と π (+si) の読みの採用を行った⑤—⑥のテキストを和訳とともに示す<sup>(17)</sup>：

- ⑤Et plorabunt me ligna campi, et plangent me bestie campestris.  
Quia non sum tristis in hoc quod moriar, nec dolet mihi quod reddo animam meam, sed quoniam in oratione preoccupatus est pater meus,  
⑥et si spontaneam me obtuli in sacrificium, timeo ne non sit acceptabilis mors mea, aut in vano perdam animam meam.  
⑤野原の木々は私のことを嘆き、野の獣は私を悼むでしょう。私は死ぬ

ということは悲しくなく、魂をお返しすることに痛みを覚えるのでもありませんが、父が誓いによって畏にかかったことが悲しいので、⑥犠牲のため自発的に自らを捧げたとはいえ、私の死は意に合わないのではないか、あるいは私は魂を空しく失うことになるのではないかと私は恐れているのです。

このテキストに基づくと、セイラの危惧の内容は次のようになる。すなわち、悲しいことだが父が彼女を犠牲にするのは自らの軽率な誓いによってそうせざるを得なくなったからなので、彼女自身は自発的に犠牲になるけれども、それでも自分の死は神に受け入れてもらえるのだろうか、という危惧である。彼女はこれについて賢人たちの意見を仰ぎ、彼らは「娘を犠牲にするような誓言は無効であるから、セイラが自発的であっても神にその犠牲は受け入れてもらえない、よって犠牲は行われてはならない」というように答えて犠牲を阻むはずだったのではないだろうか。

彼女は父への返答の②において、息子を犠牲にするアブラハムおよび犠牲になるイサクの双方とも「喜んで」(epulans, gaudens) いたことを語っていた。彼女が危惧を抱くのは、模範とすべきアブラハム父子と自分たち父娘が父親の動機および心情の点で大きく違っているからで、それを上の⑤の quia 以下で言い表していると考えられる。アブラハムが息子を犠牲にしようとするのは神の命令に従ったからであるが、エフタの場合は軽率な誓言を行ったからであった。LABにおいてアブラハムによるイサクの犠牲は、40.2 以外では 18.5 (バラムへの神の言葉) と 32.2—4 (デボラの賛歌) に言及がある。どちらの箇所でも神がアブラハムに命令したこと、そして彼が神に逆らわず息子を犠牲に捧げようとしたことが記されている<sup>(18)</sup>。だが、これら2箇所にはアブラハムが喜んでいたというような心情を描写する表現はない。40.2 でのみ彼が「喜んで」いたとの表現が用いられるが、それは LAB の著者がエフタとの相違を際立たせようとしたためかもしれない。このセイラの言葉の直前にエフタはこう述べていた

(40.1) :

Et nunc quis dabit cor meum in statera et animam in pondere, et stabo et videbo quis preponderabit, utrum epulatio que facta est an tristicia que contingit mihi? Et quia in cantico votorum aperui os meum Domino meo, non possum revocare illud.

「今、誰が私の心を天秤に、私の魂を秤にかけるであろうか。そして私は立ってどちらがより重いか見るであろう、生じた喜び<sup>(19)</sup>のほうか、それとも私に降りかかる悲しみのほうか。私は誓いの歌で私の主に対し口を開いたのだから、それを呼び戻すことはできない」。

この箇所の tristicia「悲しみ」は gaudens と対照的である。セイラは、犠牲を捧げる者も犠牲になる者もどちらも喜んでそうすべきで、それが神に犠牲を受け入れてもらえる必要条件だと考えているのであろう。40.2の②のアブラハム父子の心的状態を、犠牲の当事者たちの一般的な心構えというよりもっと重要な事柄として、つまり犠牲になろうとしている個人の魂が救われる条件として彼女は示しているのだと思われる<sup>(20)</sup>。それゆえ彼女は危惧を示したのだが、結局それは杞憂であった。神は賢人たちが犠牲に反対するのを防ぎ、彼女の死を貴いものとして受け入れると述べる。犠牲になる者の魂の救いにとって本人の熱意、積極性が何よりも重要であることを神の言葉は明らかにしていると思われる。

### 3. セイラの願望

セイラは賢人たちのもとを去ると山へ行く。彼女の危惧が杞憂であることを読者は神の独白から知るが、彼女自身には知らされない。実際、彼女の危惧は山で歌われる悲歌 (trenus) においても現われていると考えられる。悲歌は以下の構成になっている：

- a) 自然界への呼びかけ (40.5)

- b) 願望 (40.5)
- c) 幻の婚礼への嘆き (40.6)
- d) 自然界への呼びかけ (40.7)

ここでも最初と最後が対応する構成である<sup>(21)</sup>。d) は上の検討で取り上げた箇所である。本節では a) と b) を中心に検討するので、そのテキストと和訳を示す (a) b) と①②…は筆者が付したもの) :

a) ①Audite montes tremum meum, et intendite colles lacrimas oculorum meorum, et testes estote petre in planctu anime mee. b) ②Ecce quomodo accusor, sed non in vano recipiatur anima mea. ③Proficiscantur verba mea in celis, et scribantur lacrimae mee ante conspectum firmamenti, ④ut pater non expugnet filiam quam devovit sacrificare, ut princeps illius unigenitam audiat in sacrificio promissam.

a) ①聞いてください、山々よ、私の哀悼歌を。注意を向けてください、丘よ、私の目の涙に。証人になってください、岩々よ、私の魂の嘆きの。b) ②見よ、私はどのような試練に遭わされていることか<sup>(22)</sup>。でも、私の魂が空しく取られることはありませんように。③私の言葉が天まで届き、私の涙が天空の前に記されますように。④すなわち、父は犠牲に捧げると誓った娘を説き伏せているのではない、と。支配者は犠牲にするよう約束された彼の一人娘の言うことを聞き入れている、と。

彼女の危惧の現われと考えられるのは③—④の願望を表す文である。しかし、この箇所の解釈は研究者の間で一致を見ていない。最も問題となるのは④の2つの接続詞 *ut* の用法、及び *expugnet* と *audiat* の意味であり、これらにより③—④全体の解釈が大きく異なる。*ut* の解釈には次の2通りがある：(1) 目的 (*ut...non* は否定の目的) を示す、(2) 対格+不定詞の代わり (間接話法)。4世紀頃のラテン語としては両方とも可能である。(1) は James, Jacobson の解釈 (James 訳「捧げると誓った娘を父が屈

服させないために、彼の一人娘が犠牲になるよう約束されていることを彼女の支配者が聞いてくれるために」；Jacobson 訳「父親が誓った娘をあえて犠牲にしないために、支配者が自分の一人娘を犠牲に約束されたままにしておかぬように」。 (2) は Dietzfelbinger, Harrington の解釈 (Dietzfelbinger 訳「捧げると誓った娘を父は屈服させているのではない、と、彼女の君主は犠牲にするよう約束された一人娘の言葉に耳を傾けている、と」；Harrington 訳「捧げると誓った娘を父親は拒まなかった、と、支配者は自分の一人娘が犠牲になるよう約束されるのを許した、と」<sup>(23)</sup>。

(1) の James 訳によると、セイラは自分をエフタが犠牲に捧げないようにしてほしいと神に願っている。そのような願いは自発的に犠牲になろうというセイラの人物像と矛盾するので、この訳は全体としては受け入れられない。しかし、expugnare を「屈服させる」と訳している点は受け入れられよう（「強制する」の意味合いで）。これに対し Jacobson<sup>(24)</sup>はこの動詞で「強制する」のような意味は疑わしいと述べるが、*Oxford Latin Dictionary* にはこれに類した意味が見出されるので、Jacobson の疑問は当たらないと判断される (OLD, expugno の項の 5 'overcome the resistance of, persuade (a person)').

同じく (1) の Jacobson 訳によると、セイラは自分の犠牲について述べているのではなく、一般的に今後、父親や支配者がその娘を犠牲に捧げるようなことはしないでほしい、自分のような悲劇は再び起きないでほしいと願っていることになる。Jacobson は expugnet を「あえて…する」と訳し、この動詞をその他 'attempt, strive' のような意味にとるのが良いと主張するが、expugnare をこのような意味に解するのは困難である（彼はそもそも expugnet の読みに疑問を持っているためこの動詞自体の意味にこだわらないのであろう<sup>(25)</sup>）。さらに、彼は 1 つ目の ut 節中の non が 2 つ目の ut 節中にも有効であると解し、後者の節も否定の目的文として訳す。ラテン語でこのように解するのは困難と思われるが、若い娘が犠牲になる悲劇が繰り返されないようにという願いの表明をこの文に読み取ろうとす

れば、2つ目の ut 節にも否定語が必要になろう。だが、このような願いは LAB のどの箇所にも述べられておらず、それをあえてこの ut 節中に読み取らねばならない理由はないであろう。

(2) の Dietzfelbinger 訳によると、セイラは自分が父に強いられて犠牲になるのではなく、自分の意見が聞き入れられて犠牲になるのだということに神に知ってほしいと願っている。Dietzfelbinger は expugnare を「屈服させる」の意味に解する。彼の注によると、「屈服させていない」の訳は「娘を犠牲へと強制しておらず、彼女は自由意志で犠牲になる」の意味である<sup>(26)</sup>。セイラの犠牲への自発性が伝わってくるこの訳は文脈にも合致し、妥当と考えられる（ただし illius は私見では princeps を指すので、その点は除く）。

最後に (2) の Harrington 訳によると、セイラは特に自分自身のことについてではなく一般的な出来事として、娘の犠牲に父親が反対しなかったことを神に知ってほしいとセイラは願っている。Harrington がここで考えているのは、父親が娘の犠牲に反対しないという驚くべき出来事が起こったことをセイラは神に訴えている、ということであろう。だが、これは喜んで犠牲になる覚悟のできているセイラの人物像とは矛盾するので、受け入れられない。また彼は expugnare を「拒む」と訳しているが、この語をその意味で解するのは困難ではないだろうか。

以上、文脈と語の意味を検討した結果、結論として ut は対格 + 不定詞の代わり、expugnet は「説き伏せる」、audiat は「聞き入れる」として各々解するのが適切と考えられる。本節の最初に示した和訳はこの解釈に沿ったものである。セイラが神に向かって自分の言葉と涙が届くようにと願う、その涙ながらの言葉の内容とは、自分は父に強いられてではなく自発的、積極的に犠牲になるのだ、ということだと思われる。彼女は賢人たちに危惧の解消を求めたが得られず、懸念を抱いたままで今度は直接神に向かって祈るのである。彼女の犠牲への熱意がここでもまた見られるのであるが、それと同時に、彼女は自分の犠牲死についてただ懸念するだけで

はなく、自ら賢人たちを訪ねて問い、また神に祈るという行動もまた積極的に取っていることも注目されよう<sup>(27)</sup>。

### 3 結び

以上、セイラの返答と悲歌について、彼女の犠牲に対する熱意や考えが表れている箇所を中心に検討した。返答の40.3における *quia...pater meus* の節は従来解されているように直前の文の理由文ではなく、後続する文の理由文とみなすと前後の文脈および悲歌との対応関係に合致するのであろう。また彼女が危惧を示す40.3の最後の文では、Jacobsonによるテキストの読みの修正を採用し、さらに *quia...pater meus* の節と併せて読んだ上で初めて彼女の危惧の内容がはっきりすると考えられる。すなわち、模範とすべきアブラハム父子と自分たち父娘は父の動機と心情に関して異なるけれども自分の犠牲は神に受け入れてもらえるのだろうか、という危惧である。このような危惧が生じるのは、彼女は犠牲死が神に喜ばれるものであるためには犠牲を捧げる者と犠牲になる者の双方ともに熱意があり積極的でなくてはならないと考えるからである。しかし40.4の神の言葉が明らかにするのは、犠牲になる者の熱意が最も重要であるということであろう。神の言葉を知らされないセイラは悲歌の中で神に祈り、自分の犠牲に対する自発性や熱意を訴える。この箇所も解釈に問題のある箇所だが、文脈と語の意味からそのように解するのが適切と判断される。

このように *LAB* の著者が提示するセイラの姿を見てくると、幾つの特徴が浮かび上がる。言うまでもなく1つは、彼女が自らの犠牲に対し自発的で熱意があることだ。*LAB* の著者はここで殉教者を念頭に叙述を行っていると考えられるが、セイラを彼らの手本と示しているのであろう<sup>(28)</sup>。もう1つの特徴は、犠牲死が神に受け入れられるための条件について上述のような考えを彼女が持っていることである。最後に挙げられる特徴は、彼女が自らの魂が空しく失われることのないよう行動的に振舞っていることである。「父よりも賢く、賢人全員よりも思慮深い」という神

の言葉 (40.4) はそのような彼女に実にふさわしいもののように思われる。

注

- (1) LABの著者、成立時期、言語などについては以下を参照：Jacobson, H., *A Commentary on Pseudo-Philo's Liber Antiquitatum Biblicarum* (Leiden, New York, Koeln, 1996), 195-280; Fisk, B. N., *Do You Not Remember?: Scripture, Story and Exegesis in the Rewritten Bible of Pseudo-Philo* (Sheffield, 2001), 13-53.
- (2) セイラの悲歌におけるギリシア文学等の影響については Alexiou, M., Dronke, P. "The Lament of Jephtah's Daughter: Themes, Traditions, Originality," *Studi Medievali* 12 (1971), 819-863 を参照.
- (3) セイラをLABのイサクとの関連で論じる研究のうち、本稿で参照するものを挙げる(注解書を除く)：Daly, R. J., "The Soteriological Significance of the Sacrifice of Isaac", *CBQ* 39 (1977), 59-63; Davies, P. R., Chilton, B. D., "The Aqedah: A Revised Tradition History", *CBQ* 40 (1978), 514-546; Fisk, B. N., "Offering Isaac Again and Again: Pseudo-Philo's Use of the Aqedah as Intertext", *CBQ* 62 (2000), 481-507.
- (4) 使用したLABの校訂本は Harrington, D. J., Cazeaux, J., Perrot, C., Bogaert, P. M., *Pseudo-Philon: Les Antiquités Bibliques*, tome I・II (Paris, 1976; =SC volumes 229-30) のI巻(以下SCと略記)。章節もこれによる。和訳は私訳である。LABの校訂本には他に次のものがある：Kisch, G., *Pseudo-Philo's Liber Antiquitatum Biblicarum*, Publications in Mediaeval Studies 10, Notre Dame, 1949. また本稿で参照するLABの訳・注解書を挙げておく：James, M. R., *The Biblical Antiquities of Philo, Now First Translated from the Old Latin Version* (rp. of 1917 edition with a prolegomenon by L. H. Feldman, New York, 1971); Riessler, P., *Altjuedisches Schrifttum ausserhalb der Bibel* (Augsburg, 1928); Feldmann, L. H., "Prolegomenon", in M. R. James, *The Biblical Antiquities of Pseudo-Philo*, ix-cxlix (New York, 1971); Dietzfelbinger, C., *Pseudo-Philo: Antiquitates Biblicae* (Guetersloh, 1975); Harrington, D. J., "Pseudo-Philo", *The Old Testament Pseudepigrapha*, 2 vols., Ed. J. H. Charlesworth (New York, 1983-85), vol. 2.
- (5) 「丘に留まり」は (per)maneam in collibus の訳。引用したSCテキスト

の読みは *permeem in collibus* 「丘を通り」(SC の Cazeaux はこの訳).  
 だが *permeem* は *editio princeps* (=A) のみの読みで, それ以外の写本  
 には *-meem* の要素を語中にもつ読みはない (*permaneam* が K と P,  
*maneam* が  $\pi$  の読み). したがって Harrington, Jacobson のように (*per-*  
*maneam* を採用するのが妥当である. Kisch は  $\pi$  の読みで Dietzfelbinger  
 の訳もこれによる.

- (6) 「老いるでしょう」は *inveterabit* (P と  $\pi$  の読み) の訳. SC テキストの完  
 了形 *inveteravit* では文意が理解できないと思われるので, Jacobson とと  
 もに未来時称の読みを採用する. Kisch は  $\pi$  の読みで Dietzfelbinger の訳  
 もこれによる.
- (7) *quia* 節を James, Harrington および Jacobson は 'for', SC は 'car', Dietzfel-  
 binger は 'denn' の語で各々始める. Dietzfelbinger 訳 (212) 'denn ich bin  
 nicht betruemt darueber, dass..., und mich schmerzt es nicht, dass...;  
 sondern weil mein Vater sich beim Gebet im voraus verpflichtet hat,  
 aber ich mich freiwillig zum Opfer dargebracht habe, fuerchte ich, dass  
 ...'. Dietzfelbinger 訳においては木々などの嘆く理由が不適当であること  
 は Jacobson (964) も指摘している. Riessler 訳 (820) 'Ich bin ja nicht  
 darueber bekuemmert, dass ich sterben muss, noch..., sondern weil mein  
 Vater zu rasch mit seinem Geluebde war'. また Kisch のテキスト (訳は  
 ない) では⑤の初めから⑥の終わり (*animam meam*) でピリオドとなる  
 まで, 文は全部コンマで区切られ, SC のようにセミコロンが入ることは  
 ない (Kisch はテキスト全体でセミコロンを一度も用いない. コンマ以外  
 は直接語法の前のコロンのみ). なお後述 (注 12) するように Kisch は  $\pi$   
 の読みを採用しており, Dietzfelbinger も基本的に  $\pi$  の読みで訳している.
- (8) Jacobson, 964.
- (9) 「この世代における」は *in generatione ista* ( $\pi$  の読み) の訳. Dietzfel-  
 binger と Jacobson が  $\pi$  で訳している. 引用した SC ( $\Delta$  の読み) の *in*  
*generationem istam* 「この世代のために」(SC の Cazeaux, Harrington の  
 訳) は Jacobson (966) も指摘するように文意が理解できないのではない  
 だろうか.
- (10) 39.11: *Ecce oravit Ieptan ut offerat mihi omne quod primum obviaverit*  
*ei. Et nunc si canis primum obviaverit Iepte, numquid canis offeretur*  
*mihi? Et nunc fiat oratio Iepte in primogenitum eius, id est in fructum*

ventris ipsius, et petitio ipsius in unigenitam eius. Ego autem liberans liberabo populum meum in isto tempore, non pro eo sed pro oratione quam oravit Israel. 「見よ、エフタは最初に彼を出迎えたものをどんなものでも私に献げると誓った。今もし犬が最初にエフタを出迎えたなら、犬が私に捧げられるのだろうか。今エフタの誓いは彼の初子に置いて、つまり彼自身の胎の実において成就するがよい。そして彼の願いは彼の一人娘において成就するがよい。しかし私は今この時、私の民を解放するであろう。彼のためにではなく、イスラエルが祈った祈りのために」。

- (11) Ginzberg, L., *The Legends of the Jews* (Philadelphia, 1968; rp. of 1913 edition), vol. VI, 203, n. 108; Feldmann, cxxiii; Harrington, 353. また Ginzberg (203, n. 109) は、ラビ文献においてエフタとその同時代人は人間を犠牲に捧げたことを激しく非難されていると記している。
- (12) 大まかに言えば LAB の現存する写本は、 $\Delta$  と  $\pi$  と名づけられた 2 つの系統に分かれる。Harrington が校訂した SC は  $\Delta$  を基にしており、Kisch の校訂本は  $\pi$  を基にしている。Jacobson (257-273) は  $\Delta$  と  $\pi$  を詳しく検討した結果、どちらかの系統が常に優位にあるということではなく、読みが適切かどうかは問題のある箇所ごとに内的に吟味して決めるべきだと述べている。詳細な分析に基づく Jacobson の結論は説得力があると思われる。
- (13) 先述のように私見では⑤の quia 節は⑥の timeo 以下の理由文なので、仮に  $\pi$  の読み et...sacrificium をそのまま採用し、これを quia の理由文全体に含めると、次のような意味になる：「私は死ぬのは悲しくないが、父が誓いの罨にかかったことと自分が自発的に犠牲になったことが悲しいので」。「自発的に犠牲になったことが悲しい」は文脈に合わない。また、quia 節を⑤の終わりの pater meus までとみなし（筆者はこう考えるが）、 $\pi$  をそのまま採用することも不可能である。直後の timeo の文と併せて読むと意味が理解できないからである（「私は…父が罨にかかったことが悲しいので、そして私は自発的に犠牲になり、…と恐れている」のような訳になる）。
- (14) Jacobson, 964
- (15)  $\Delta$  を採用する場合には non を削除すると、同様の意味が得られるであろう：et si spontaneam me obtulero in sacrificium 「私は犠牲のため自発的に自らを捧げるであろうとはいえ」。この言葉も文脈に適合していると思われる。 $\Delta$  で動詞の時称が未来完了であるのは、実際に犠牲が実施される

時はまだ先であるので、その未来における行為を示すと考えられる。πの完了の読みのほうが彼女の覚悟のほどが強調されるだろう。

- (16) Jacobson, 964
- (17) このテキストに拠れば彼女の返答全体は最初と最後が対応する構成になる (SC テキストではそうではない)。①の *quis est qui...liberatum?* (「死ぬのが悲しい人がいようか」) は⑤の *quia non sum..., nec dolet...animam meam* (「死ぬことは悲しくない」) で再び取り上げられている。また②のアブラハム父子についての文は、エフタ父娘についての⑤—⑥の *in oratione..., et si...sacrificium* に親子という枠組において対応している (内容上は対比)。
- (18) 18. 5: *Et filium eius petii in holocaustum et adduxit eum ut componeretur in sacrario, ego autem reddidi eum patri suo et, quia non contradixit, facta est oblatio eius in conspectu meo acceptabilis, et pro sanguine eius elegi istos.* 「そして私は彼の息子を焼き尽くす献げ物にするよう求め、彼は子を祭壇に置くために連れて行った。しかし私は子をその父に返した。そして彼は抗わなかったので、彼の献げ物は私の前で喜ばれるものとなった。そして私は彼 (息子) の血と引き換えにこの人々 (イスラエル人) を選んだ」。『彼は抗わなかった』*contradixit* の主語はアブラハムと考えられるが、イサクの可能性もある。これについては Jacobson, 583; Fisk, 505 参照。また *pro sanguine* は「血と引き換えに」ではなく「血のゆえに」の訳も可能だろう。32. 2: *dixit ad eum Deus: Occide fructum ventris tui pro me, et offer pro me sacrificium quod donatum est tibi a me. Et Abraham non contradixit, sed profectus est statim.* 「神は彼に言われた。『あなたの胎の実を私のために殺せ。そしてあなたに私から与えられたものを犠牲として私のために捧げよ』。アブラハムは抗わず、直ちに出発した」。
- (19) 「生じた喜び」はアンモン人との戦いの勝利から生じた喜びを指す。
- (20) Davies と Chilton の見解: 「このような場合における適切な振る舞いの見本として単にアブラハムとイサクの例にセイラは言及しているに過ぎない」(Davies-Chilton, 527) に筆者は賛成しない。Daly (61) がセイラの返答全般について「犠牲の価値全体が内的性質 (internal dispositions) に依存することを明らかに主張」していることと述べていることは妥当と思われる。
- (21) Jacobson (976) はこれを 'ring composition' と述べている。

- (22) *accusor* は *ἐλέγχουαι* の訳であるとする SC とともに「試練に遭わされている」と訳出。Harrington の訳も同様。Jacobson の訳は「有罪の宣告を受けている」。Dietzfelbinger の訳は  $\pi$  の *accusamur* の読みで「私たちは非難されている」。
- (23) James 訳 'that the father overcome not (*or* fight not against) his daughter whom he hath vowed to offer up, that her ruler may hear that his only begotten daughter is promised for a sacrifice.'; Jacobson 訳 'in order that a father not venture to sacrifice a daughter whom he has vowed, and a ruler not let his only daughter be promised for sacrifice.'; Dietzfelbinger 訳 'dass der Vater nicht die Tochter bezwinge, die zu opfern er gelobt hat, und dass ihr Fuerst die zum Opfer versprochene Einziggeborene hoere.'; Harrington 訳 'That a father did not refuse the daughter whom he had sworn to sacrifice, that a ruler granted that his only daughter be promised for sacrifice.'
- (24) Jacobson, 970
- (25) Jacobson, 970
- (26) Dietzfelbinger, 213
- (27) Dietzfelbinger (213) は、セイラの悲歌は父への返答に見られる思考の流れと矛盾すると述べる。Jacobson (968) もこれに同調し、セイラが先に表した喜びと悲歌の悲しみとの間には矛盾があると言う。しかし本稿の1節で示したように、父への返答では2種類のセイラの悲しみが表現されている。若くして逝くことへの悲しみと、父が誓いの罨にかかったことへの悲しみである。悲歌の最初の約3分の1で後者が再び扱われ、残りの3分の2で前者が取り上げられるのであるから、矛盾ではないだろう。ただ、先行する箇所婚礼を示唆する記述が何もないにもかかわらず、悲歌でそれに関して詳細に描写されるのには確かにかなり唐突な感じがある。
- (28) Jacobson, 967 でもこの点は言及されている。